



Title	[査読研究ノート] 明治期以降における大阪の劇場建設と大工・中村儀右衛門：履歴書をてがかりとして
Author(s)	藤岡, 真衣
Citation	関西大学なにわ大阪研究, 1: 15-33
Issue Date	2019-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/16819
Rights	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

明治期以降における大阪の劇場建設と大工・中村儀右衛門

——履歴書をてがかりとして——

藤岡真衣

はじめに

歌舞伎は、江戸時代以降、江戸・京・大坂を中心として発展していった。劇場も各地に建てられ、その構造などについて、これまで調査・研究が進められてきた。

明治期以降の道頓堀や大阪各地の劇場建設の変遷やその様子については、新聞記事や芝居番付、演劇雑誌などの資料に基づいて編纂された『近代歌



中村儀右衛門 肖像写真

(関西大学なにわ大阪研究センター所蔵)

舞伎年表 大阪篇^①にまとめられている。しかし、同書に基づいた資料は新聞記事など間接的なものが多く、当時の劇場の設計・建設に関わった当事者による直接的な資料は、あまり残っていないため、それ以上の研究の

進展を阻害する要因となっている。

しかし、平成二十四年(二〇二二)、関西大学大阪都市遺産研究センター(現関西大学なにわ大阪研究センター)が新たに収蔵した「大阪の劇場大工 中村儀右衛門資料」(以下、「中村儀右衛門資料」と略す)は、明治期から大正期にかけて道頓堀をはじめとする大阪各地の数多くの劇場の設計・建設に関わった中村儀右衛門(一八五二～一九二二)自身が書き残した資料であることから、当時の大阪の劇場建設について具体的に知ることができる。その概要はすでに別稿として発表しているが、本稿はそれにつづくものである^②。

これまで、日本の劇場に関する研究は、建築史の立場から劇場の変遷や建築構造について触れるもの多かつたが、やがて演劇史・芸能史・文化史・社会史などの視点からも、建物の内部構造や劇場空間が研究対象となり、分析が進められている^③。

特に明治期以降の劇場史に関していえば、文明開化の風潮のなかで、日本の演劇も近代化が進んだ。たとえば、明治九年(一八七六)十一月に火災で焼失し、のちに再建されて十一年六月に開場した東京の新富座は、江戸時代の劇場様式や設備を一変させた画期的な劇場であったことで知られ

ており、この舞台と客席の工事を担ったのが、歌舞伎の大道具師の棟梁である長谷川勘兵衛であった。^④

明治二十年代になると、東京の歌舞伎座（高原弘造設計。明治二十二年十一月開場）や春木座（河合浩蔵設計。明治二十四年十二月開場）などのように、西洋の建築技術を学んだ建築家が劇場を設計するようになり、洋風の外観や和洋折衷の構造を持つ劇場が次々と建てられていった。

このように、東京の劇場については、その設計者を含め、すでに研究で明らかになっているが、大阪の劇場建設については直接関わった人物の資料が見当たらなかったこともあり、詳しく検討されてこなかった。

そこに新たに大工・中村儀右衛門の資料群が発見されたのである。しかし、彼についても、大阪の劇場建設の歴史の上で重要な役割を果たした大工であるが、その実態については必ずしも十分に明らかになっていない。

そのため本稿では、中村儀右衛門自身が記した履歴書の内容に注目し、大工としての経歴をたどりながら、彼がたずさわった大阪の劇場建設について明らかにしていきたい。

一 「中村儀右衛門資料」と履歴書

「中村儀右衛門資料」は、関西大学なにわ大阪研究センターが所蔵し、総点数四五五点におよぶ。その内容は、儀右衛門の履歴書、儀右衛門が記した日記・覚書、道頓堀をはじめとする劇場などの図面、劇場の構造を記した書類（建築仕様書・摘要書・明細書など）、大道具帳、勘定帳、出勤簿であるが、その中心となるのは劇場関係の資料である。^⑤

「中村儀右衛門資料」についてはこれまで、道頓堀の角座の図面と仕様書の調査・分析、梅田の劇場「大阪歌舞伎」に関する調査、さらに儀右衛門の日記帳の翻刻と分析などの研究があり、資料群を紹介する展覧会も行な

われて展示図録が発行されている。^⑥

儀右衛門が記した履歴書は五冊残っており、これらについてみてみたい。^⑦

五冊の履歴書は、「履歴書」や「履曆書」など、表題がそれぞれ異なるため、「明治卅五年六月」と記載のあるものを履歴書①、「明治四十五年六月」と記載のあるものを履歴書②、「大正元年九月」と記載のあるものを履歴書③、「明治四拾老年九月改メ設計者履曆書」と記載のあるものを履歴書④、「設計監督者履歴書」と記載のあるものを履歴書⑤と区別して表記したい。これらは、いずれも野線入りの用紙を袋綴じにした冊子で、縦書きで記されている。これらの履歴書五冊の概要をまとめたものが、【表1】である。

履歴書①は、表紙はなく、本文の丁数は五丁である。同書の一丁表から四丁表にかけて、儀右衛門の出生から明治二十九年十一月までの経歴が記されている。末尾に「明治卅五年六月（四丁裏）」とあることから、明治三十五年（一九〇二）六月に記載されたことがわかる。さらに五丁表に、海軍大将であった伊東祐亨が儀右衛門に贈った賞状の写しの一部分を確認することができる。

履歴書②は、表紙に「履歴書」と書かれている。本文の丁数は、表紙を除いて八丁である。一丁表から五丁裏にかけて、出生から明治四十三年（一九一〇）までの経歴を記している。その末尾には、「明治四十五年六月（六丁表）」と記されていることから、明治四十五年（一九一〇）六月に記載したものであることがわかる。六丁表から七丁裏にかけては、伊東祐亨や大阪演劇株式会社が儀右衛門に贈った賞状の写しがあり、八丁裏には、千日土地株式会社に提出した附帯願書の写しが記されている。

また、履歴書②の本文中と欄外には、加筆・修正がみられる。たとえば、六丁表の欄外には「大正貳年参月ヨリ堀江遊廓演舞場新築ニ付設計及監督ス目下工事中」とあり、明治四十五年以降の経歴が確認できる。したがって履歴書②は、大正二年（一九一三）三月以降に加筆したものであること

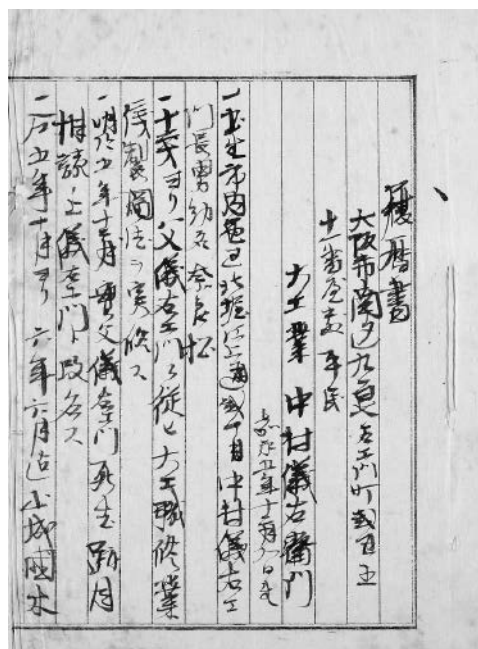
【表1】中村儀右衛門の履歴書5冊の概要

資料	表題	本文の丁数	履歴書を記載した年月日	履歴書の内容	履歴書に記された賞状の写しや願書	寸法(cm) (縦×横)
履歴書①	「履歴書」 (表紙なし)	5丁	明治35年6月(4丁裏)	出生から明治29年11月までの経歴 (1丁表～4丁表)	・伊東祐亨から贈られた賞状(本文の一部)(明治30年初夏)(5丁表)	26.7×19.0
履歴書②	「履歴書」	8丁	明治45年6月(6丁表)	出生から明治43年までの経歴 (1丁表～5丁裏) ※欄外に加筆があり、大正2年までの経歴がわかる	・伊東祐亨から贈られた賞状(明治30年初夏)(6丁表～6丁裏) ・大阪演劇株式会社から贈られた賞状(明治30年12月28日)(7丁表～7丁裏) ・千日土地株式会社に宛た附帯願書(8丁裏)	24.6×17.0
履歴書③	「履歴書」	8丁	大正元年9月(5丁表)	出生から明治43年までの経歴 (1丁表～4丁裏) ※明治28年3月の経歴(本文の一部)と明治29年5月、同年11月の経歴(8丁表～8丁裏)	・伊東祐亨から贈られた賞状(明治30年初夏)(5丁表～5丁裏) ・大阪演劇株式会社から贈られた賞状(明治30年12月28日)(6丁表～6丁裏)	27.0×19.5
履歴書④	「明治四拾叁年九月改メ設計者履歴書」	14丁	明治33年11月(6丁裏) ※14丁裏には「明治四拾年貳月吉日」と書かれている。	出生から明治29年11月までの経歴 (1丁表～6丁表) ※明治30年以降の経歴 (11丁裏～12丁表)	・伊東祐亨から贈られた賞状(明治30年初夏)(8丁表～8丁裏/13丁表～13丁裏) ・大阪演劇株式会社から贈られた賞状(明治30年12月28日)(9丁表～10丁表/13丁裏～14丁表) ・八千代座の座主吉田卯之助から贈られた賞状(明治34年11月)(14丁表)	23.4×16.5
履歴書⑤	「設計監督者履歴書」	5丁	年月日なし	出生から明治29年11月までの経歴 (1丁表～3丁裏) ※明治34年の経歴(本文の一部)(4丁表)	・小劇場改造願(明治41年)(5丁表)	27.9×20.0

が推測できる。

履歴書③は、表紙に「履歴書」と記され、本文の丁数は、表紙を除いて八丁である。同書の一丁表から四丁裏にかけて、出生から明治四十三年までの経歴をみることで、その経歴の末尾には、「明治四拾五年木■^④大正元年九月」(五丁表)と書かれている。その続きに、伊東祐亨や大阪演劇株式会社が贈った賞状の写し二点が確認できる。同書の八丁表・同丁裏には、明治二十八年三月から二十九年十一月にかけての経歴が記されているが、本文が途中から始まっていることから、のちに履歴書③に綴じ込まれたものであることが考えられる。

履歴書④は、表紙に赤い文字で「明治四拾叁年九月改メ」、墨書で「設計者履歴書」とあり、本文の丁数は、表紙を除いて十四丁である。同書の一丁表から六丁表にかけて、出生から明治二十九年十一月までの経歴が記され、その末尾には「明治参拾叁年十一月」(六丁裏)と記されている。それに続いて、伊東祐亨や大阪演劇株式会社から贈られた賞状の写しが綴じら



履歴書①

(関西大学なにわ大阪研究センター所蔵)

れている。

十一丁裏から十二丁表にかけては、明治三十年代以降の経歴が書かれている。その後に、伊東祐亨の賞状と大阪演劇株式会社賞状の写しがあり、それらに加えて、松島八千代座の座主である吉田卯之助が儀右衛門に宛てて明治三十四年（一九〇一）十一月に贈った賞状の写しがみえる。末尾の十四丁裏には「明治四拾年式月吉日」と書かれている。

履歴書⑤は、表紙に「設計監督者履歴書」とあり、本文の丁数は、表紙を除いて五丁である。同書の一丁表から三丁裏にかけて、出生から明治二十九年十一月までの経歴が記されている。また、四丁表に、明治三十四年に松島八千代座の座主の依嘱を受けたことが加筆されている。さらに、五丁表には、儀右衛門が、明治四十一年に大阪府知事の高崎親章に宛てて提出した「小劇場改造願」がみられ、つぎのように記されている。

小劇場改造願

私義先キ御許可ヲ蒙リ居り候小劇場建焼失候ニ付今般改造仕度候間許可相成度摘要書仕様書並ヒニ図面相添へ此段相願候也

明治四十一年 月 日

大阪市南区九郎右衛門町二百五十一番屋敷

設計者 中村儀右衛門
監督者

大阪府知事高崎親章殿

大阪で、明治三十年（一八九七）十月に改定された、劇場に関する法令「劇場取締規則」（明治十五年に制定後、十七年、十九年、二十年に改定）によると、劇場を新設・再築・改造・変更・修繕する際には、劇場の種類（大劇場・小劇場）、位置、敷地および建坪数、建物の図面、建物の仕様書、落成期日などを記した書類を所轄の警察官署を経て、大阪府庁に願い出て許可を得る必要があった¹²。特に、劇場の新設・再築・改造に関わる書類に

は、建築設計者および建築監督者の署名と捺印が必要であり、かつ設計者監督者の履歴書を添付することが義務づけられていた。

儀右衛門の場合も、履歴書の作成時期が、明治三十年代以降のものがほとんどであるため、劇場建設に関わる仕事をする際に履歴書を作り、提出していた可能性が高い。

以上のことから、これらの履歴書は、儀右衛門が控えとして手元に残したことが推測できる。特に履歴書②には、後年に加筆・修正が加えられていることから、建設などの仕事を請け負うために、履歴書を新たに作成しようとしていたのかもしれない。

また、履歴書五冊に記された住所（大阪市南区九郎右衛門町二百五十一番屋敷）から、儀右衛門が、道頓堀を拠点として劇場建設の仕事を営んでいたことがわかる。

二 中村儀右衛門の経歴

つぎに、中村儀右衛門が、どのような人物であったのかをみていきたい。履歴書五冊から、儀右衛門の出生から大正二年（一九一三）までの足跡をたどることが可能であり、それらをもとに経歴をまとめたものが、【表2】である。儀右衛門の大工としての経歴は、その活動時期から、およそ四つの時期に分けることができる。

- 第一期 大工修業を始めた時期（一八五二年～一八七二年）
- 第二期 大工として仕事を始めた時期（一八七二年～一八八四年）
- 第三期 東京を中心に活動した時期（一八八五年～一八九〇年）
- 第四期 劇場を建設した時期（一八九〇年～一九二一年）

履歴書以後の活動については、儀右衛門が晩年まで劇場建設の仕事に関わっていたことが、諸資料からも明らかになっているため、亡くなる大正

【表2】中村儀右衛門の経歴

年月日	年齢	主な経歴	典拠(履歴書)					備考
			①	②	③	④	⑤	
嘉永5年12月8日	1	中村儀右衛門の長男として、大阪市西区北堀江上通二丁目に生まれる。幼名奈良松。	●	●	●	●	●	
文久3年	12	父儀右衛門に従い、大工職の修業をし、製図法を実修する。	●	●	●	●	●	履歴書①～④に12歳と記載があるのみで、年の記載はない。履歴書⑤には「文久3年」の記載がある。
明治5年2月	21	父が死去し、跡目相続の上、儀右衛門と改名する。	●	●	●	●	●	履歴書①には「十二月」とある。
明治5年10月～6年6月		山城国木津郡大工棟梁の椿井平四郎に従い、製図と大工を実習し、同所に大里小学校を建築する。	●	●	●	●	●	
明治6年7月～	22	大阪市東区淡路町二十三区小学校の建築を下請し、成工する。	●	●	●	●	●	
明治8年～10年	24	岡山県土族大工高山照朝を師として学ぶ。	●	●	●	●	●	
明治10年11月～12年6月	26	熊本県立病院新設につき、下請し、建築する。	●	●	●	●	●	
明治12年6月～13年4月	28	鹿児島市元種ヶ島屋敷跡に同県土族中村義行の邸を設計し、建築する。	●	●	●	●	●	履歴書⑤には「中村儀行」とある。
明治12年又は13年		鹿児島私学校主事中原満兵衛の囑託により、故大将西郷隆盛公の神廟内の神前を造営し、私学校その他知名の士より賞状を受ける。	●	●	●	●	●	
明治18年8月～19年9月	34	東京の皇居造営につき、福岡県土族廣津三助の名義で第一区第三十三号女官面謁所御内儀係りを、宮内省技師尾崎新吉の監督のもとで、建築する。	●	●	●	●	●	履歴書⑤は明治18年8月から20年3月までの経歴をまとめて記す。
明治19年4月～20年1月	35	横須賀鎮守府建築部東京支部の命により、海軍省水路部観象台と日黒火薬庫第三部を建築する。	●	●	●	●	●	
明治19年8月～20年1月		東京芝区高輪土族三宮信胤の邸を、工学士松崎満長の監督のもとで設計し、建築する。	●	●	●	●	●	履歴書①には、「十九年九月」とある。履歴書②には「三宮信胤」とある。履歴書⑤には「松崎満吉」とある。
明治19年9月～20年4月		栃木県塩原にて、伊東祐磨の別荘を設計し、建築する。	●	●	●	●	●	履歴書⑤には「伊東祐磨」とある。
明治20年3月～21年3月	36	明治工業会社技師瀧大吉の指名を受け、その監督のもとに、東京芝区新橋外丸木写真館を設計し、建築する。	●	●	●	●	●	
明治22年2月～23年11月	38	東京芝高輪海軍大将伊東祐亨の邸を設計し、建築する。	●	●	●	●	●	
明治23年9月～24年4月	39	東京府の劇場取締規則改正につき、囑託を受け、向柳原に柳盛座を建築する。	●	●	●	●	●	
明治25年～26年	41	新町廊事務所と婦徳会場の新築につき、同廊のドクタクにより建築する。		●				欄外に記載。
明治26年1月	42	大阪市内千日前の横井勘市の依頼を受けて、横井座を設計し、建築する。	●	●	●	●	●	
明治27年5月	43	道頓堀・弁天座の座主尼野吉郎兵衛の依頼により、弁天座を設計し、新築する。	●	●	●	●	●	
明治28年3月	44	道頓堀・浪花座の座主秋山儀四郎の囑託により、浪花座の大修繕の設計と工事を成工する。	●	●	●	●	●	
明治29年5月	45	天満天神社北裏門にある天満座の新築につき、設計と工事を囑託される。	●	●	●	●	●	
明治29年11月		大阪演劇株式会社の新劇場を梅田停車場前に建設するため、設計と建築工事を請負い、竣工する。	●	●	●	●	●	
明治31年5月	47	道頓堀・角座の座主秋山儀四郎の囑託により、角座の大修繕の設計と工事を成工する。		●	●	●		
明治34年3月	50	松島八千代座の座主吉田卯之助の囑託により、八千代座新築につき、設計と工事を請負い、成工する。		●	●	●	●	履歴書⑤は本文の一部のみ記されている。
明治41年8月	57	小劇場常盤座の設計と監督をする。		●	●	●		
明治41年8月		小劇場玉造座の座主入江伊助の囑託により、設計と工事建築をする。		●	●	●		
明治41年冬		海軍大将元帥伊東祐亨の邸において、祐亨直筆の軸物「規矩者方圓ノ基」の書を贈与される。		●	●	●		
明治42年8月	58	小劇場相生座の設計と監督をする。				●		履歴書④。ただし、本文に取り消し線がある。
明治43年	59	道頓堀・浪花座新築につき、座主高木徳兵衛の囑託により、設計と工事を請負い、成工する。		●	●	●		
明治43年		老松町・老松座の座主伊藤利作の囑託により、設計と建築工事を請負い、成工する。		●	●			
明治43年11月～44年4月		千日前大矢藤松のドクタクにより、劇場電気館を設計し、建築する。		●				欄外に記載。
明治44年6月～	60	千日前帝國館活運写真を設計し、建築する。		●				欄外に記載。
明治44年11月～45年6月		高木徳兵衛のドクタクにより、京都の新京極・京都座の設計と監督をし、成工する。		●				欄外に記載。
明治45年(1912)6月～大正元年11月	61	千日前山田幸太郎のドクタクにより、劇場常盤座を設計し、建築する。		●				欄外に記載。
		東京市浅草区橋場在古水幸七氏のドクタクにより、東区平野町四丁目御霊神社前の活運写真場五二館を設計し、建築する。		●				欄外に記載。明治45年の常盤座の後に記されているが、年月は未詳。
大正2年3月～	62	堀江遊廓演舞場新築につき、設計と監督をする。		●				欄外に記載。

※年齢は満年齢で記載した。

十年（一九二二）までを第四期に含めた。以下、第一期から第四期を概観しておきたい。

第一期は、儀右衛門が、大工修業を始めた時期である。儀右衛門は、嘉永五年（一八五二）十二月八日、父中村儀右衛門の長男として、大坂の堀江に生まれ、幼名は奈良松といった。十二歳から父のもとで大工の修業を始め、製図法を学んだ。父は大工を家業としていたことがうかがえ、息子の奈良松（のちの儀右衛門）に跡目を継がせるべく、その基礎修業をさせたことが考えられる。

第二期は、明治五年（一八七二）二月に、父の跡目を相続して儀右衛門と名前を改め、大工として活動し始めた時期である。まず、山城国木津郡の大工棟梁・椿井平四郎のもとで、製図と大工の実習をし、小学校を建設し、その翌年も、大阪で小学校の建設工事にたずさわった。明治八年（一八七五）から十年（一八七七）にかけては、岡山県士族の大工・高山照朝のもとで、さらに修業を積んだ。明治十年十一月から十二年（一八七九）六月にかけては、熊本県立病院の新設工事を引き受けている。このように小学校や病院などの公共の建物だけでなく、明治十二年から十三年（一八八〇）にかけては、鹿児島で個人の邸宅や西郷隆盛の神廟に関わる建物の工事をてがけた。

第三期では特に、明治十八年（一八八五）から翌十九年にかけての東京の皇居造営に関わる仕事にたずさわっていることが注目される。

皇居は、明治六年（一八七三）に焼失したため、明治十七年（一八八四）から二十一年（一八八八）にかけて造営工事が行なわれた。この間、全国から優れた建築関係の職人や大工が東京に集められ、儀右衛門も、その腕を買われてこの工事に参加したようである。¹³

その後、明治十九年から翌二十年にかけて、松崎満長の監督の下で、三宮邸（西洋館）の建設の仕事を請け負った。松崎満長は、松ヶ崎萬長（一

八五八〜一九二二¹⁴）のことであったと思われる。萬長は、ドイツで建築技術を学んだ建築家であった。また、明治二十年から二十一年にかけては、明治工業会社の瀧大吉の指名を受け、その監督の下で写真館を設計し建設した。瀧大吉（一八六一〜一九〇二）¹⁵は、工部大学の造家学科に入学し、外国人教師のもとで西洋の建築技術を学んだ建築家であった。

このようにして儀右衛門は、東京で人脈を広げていっただけでなく、洋風建築についても学んだ可能性が高い。

第四期は、数多くの劇場建設にたずさわった時期である。明治二十三年（一八九〇）から二十四年にかけて東京の柳盛座の建設に関わった後は、大阪に戻って劇場の設計・建設・修繕の仕事をてがけるようになった。

大阪で儀右衛門が関わった劇場としては、道頓堀の弁天座・浪花座・角座、千日前の横井座・常盤座・電気館、梅田の大阪歌舞伎、天満の天満座・老松座、松島八千代座、堀江演舞場、玉造座などが履歴書に記されている。履歴書からわかる儀右衛門の経歴は、大正二年までであるが、それ以後も、劇場建設の仕事に関わり、大正八年（一九一九）六月から翌九年十月にかけては、角座の施工にもたずさわった。¹⁶

しかし、角座の新築工事を完成させた儀右衛門であったが、その翌年の大正十年（一九二二）一月二十一日に病氣のため亡くなった。『大阪朝日新聞』（大正十年一月二十四日付）に、儀右衛門の訃報が伝えられ、儀右衛門の長男の宗三と、儀右衛門の弟の奈良市、関係者の連名とともに、葬儀を大阪の「南区下寺町三丁目大覚寺」で行なうことが記されている。また、「中村大道具一同」と記した訃報も掲載され、儀右衛門が劇場の大道具師としても活躍していたことがわかる。これらからも、儀右衛門が晩年にいたるまで劇場の仕事に関わっていたことがうかがえる。

以上のように、儀右衛門は第四期に、数多くの劇場を設計・建設していたことは明らかであるが、それらにどのように関わっていたのかを具体的に

にみていきたい。

三 中村儀右衛門と劇場建設

履歴書の内容をもとに、中村儀右衛門が関わった各劇場の建設から開場までの経緯をみていきたい。

(一) 東京の柳盛座の設計・建設

最初に、儀右衛門が建設に関わった劇場は、東京・下谷向柳原町の柳盛座である。

柳盛座は、明治十五年（一八八二）に下谷二長町にあった福島座が移転改称した劇場である。⁽¹⁷⁾のちの明治二十四年（一八九一）六月末に、劇場が新築落成したことを新聞記事が伝えており、その仕事を担当したのが儀右衛門であった。履歴書①につきのように記されている。

式十三年九月ヨリ式十四年四月迄東京府劇場取締規則改正ニ付殊ニ囑^マ托^マヲ受ケ向柳原柳盛座ヲ新規雛形ノ設計ヲ為シ建築ス増田警視庁技師ノ監督ヲ受ケ此坪数式百余坪

これによれば、東京府の劇場取締規則が改正されたため、柳盛座の「新規雛形ノ設計」が必要となったようである。

劇場取締規則は、劇場に関する法令で、明治十五年に東京府で公布され、各府県でも公布されたが、府県ごとにその基準は異なっており、何度も改定を重ねた。東京府の規則は明治二十三年（一八九〇）八月に改定されたことから、儀右衛門は、改定直後の九月に劇場の工事を引き受けたことになる。

落成した柳盛座について、『東京朝日新聞』（明治二十四年七月八日付）は、「改築以来新富座の雛形といふ評判を取つた」とも記している。

柳盛座は、木戸銭が二銭と安価であったことに加えて、当時、九代目市川團十郎の芸や台詞を似せて「二銭の團十郎」とも呼ばれていた坂東和好が出演して評判になっていた。

(二) 横井座の設計・建設

東京の柳盛座の工事に関わった儀右衛門は、その後、明治二十五年（一八九二）に活動の場を大阪に移しており、新町廓の事務所と婦徳会場を建設している。

以下、『近代歌舞伎年表 大阪篇』と当時の新聞記事をもとにして、儀右衛門の足跡をたどってみたい。

明治二十六年（一八九三）に、儀右衛門が引き受けた仕事は、千日前の横井座の設計・建設であった。千日前は、道頓堀の南側に隣接する地域で、明治期になって土地の再開発が進み、興行地として発展していった。

儀右衛門の履歴書①には、

式十六年一月市内千日前横井勘市氏ノ依頼ヲ受ケ大劇場横井座ノ設計及建築ヲ為ス五百余坪

として、明治二十六年一月に横井勘市から仕事を請け負ったことが記されている。横井座の建設経過やその規模については、『大阪朝日新聞』（明治二十八年十二月六日付）が、つぎのように報じている。

千日前繁昌の事は前号の紙上にも記しつ之れも其中の重なる現象として数ふべきは今度落成し、劇場横井座なり 同座は一昨年二月より材木を引き始め同じき七月より工事に着手し、ものなるが総坪数千七百坪あり 建坪五百三十余坪表間口十六間二尺四寸奥行廿八間四尺二寸舞台の広さ十間四尺正面両側敷とも総て勾欄^{てすり}作りの三階にて家根の棟には金色の鯨^{しやうじほ}針を上げ棧敷の裏手には築山を設け 樹木の中に噴水器をしつらひ頗る美事の構造なりといふ

儀右衛門が仕事を請け負った後、翌二月には早速建材が調達され、同年七月に工事を始めている。その後、明治二十八年（一八九五）十二月頃には、工事がほぼ完成したようである。この劇場は、屋根に金色の鯨鉾を上げ、棧敷の裏手に築山や噴水器を設けた見事なものであったという。しかし、『大阪朝日新聞』（明治二十九年一月十九日付）の記事によると、横井座の近辺にある小屋を取りはらって火除地を設置しなければ、営業の許可が下りないという問題に直面したようである。

それらの課題が克服された後、明治二十九年（一八九六）三月八日に横井座の新築落成開場式が行なわれた。⁽²⁰⁾ところが、その翌日に座主の横井勘市が暴徒に襲われる事件が起こり、⁽²¹⁾十九日に死去したため、興行は二十日から二十二日まで休業する事態となり、二十三日から同じ演目で再開したようである。⁽²²⁾

この横井座は明治三十三年（一九〇〇）十一月に南大劇場と改称されたが、三十五年（一九〇二）一月に焼失し、その後、春日座として三十七年（一九〇四）四月に新築開場している。

(三) 弁天座の設計・建設

江戸時代、道頓堀には多くの劇場が建ち、明治期以降も芝居町として賑わいをみせた。そのうちのひとつであった竹田の芝居は、明治九年（一八七六）一月八日に焼失する。同年四月に新しい劇場が建設されるが、同月十八日に劇場内で火事が発生し、再び焼失した。その後、再建された劇場は、弁天座と改称して同年十一月に開場した。しかし、明治二十七年（一八九四）五月六日、劇場内からの出火により、⁽²³⁾三度目の火災に見舞われて焼失した。

このとき、新たな弁天座を建てるために、設計・建設をてがけることになったのが、儀右衛門であった。履歴書④にはつぎのように記されている。

式拾七年五月市内道頓堀弁天座主尼野吉良兵衛依囑ニ因リ弁天座ヲ新築設計ヲ為シ尚之レヲ建築ス賞美金壹百円ヲ贈与セラレル此坪数式百四十八坪

弁天座の座主の尼野吉郎兵衛は、劇場が焼失した直後に、儀右衛門に設計および建設を依頼していたことが、ここからわかる。

「弁天座の新築」と題して掲載された『大阪朝日新聞』（明治二十七年六月十五日付）の記事が、再建される劇場について紹介している。

本火事のあらびにあはれ一宵の廻り舞台高堂変じて無惨の焼土と化したりし弁天座は予て新築出願中なりしが愈よ一昨十三日の日附にて建築を許可せられ昨十四日座主尼野吉郎兵衛を南警察署へ呼出して其の指令を下げ渡されたり依りて昨日より俄かに職工の人員を増して賑はしく職事を始めたるが今其の設計の模様を聞くに従前の地面三百零七坪なりしを更に六十九坪を加へ表口十七間奥行二十三間総坪三百零七坪となし棟上りも猶ほ五尺を増して五十三尺の御殿造りに改め在来の垂鉛葺は兎角雨音の烈しき為め音楽舞詞を妨ぐる事あれば今度は悉とく瓦葺になす事とす木材は惣梅造りにて天井は蠟色椽の枠を取り其の中は残らず繻珍張とし棧敷の力柱は鉄にして之を朱塗となし場は二間の合間に八寸幅の通路を設くまた場の下も棧敷の下も惣漆喰にして床下に一尺五寸づゝの空気抜きを設け専ら見物の健康を保つ事とし表三階の上部は運動場とし高津生玉天王寺より市中壹円を一眸中にをさめ遠くは木津川天保山を眺むる事とす此の建坪二百八十五坪にして東西三間づゝの空地へは四季の草木を栽込み便所は舞台の西手へ廻して此の火除運動場より少しも見えぬやうにするといふ又東西に高さ十八尺の防火壁をめぐらし楽屋の後部は残らず土蔵造りとして専ら火災を避くる計画なりとぞ座主は是非とも九月までには落成さするとて非常に工事を取急ぎ居るよしなり

この記事によると、弁天座新築の出願は六月十三日付で許可され、翌十四日に座主の尼野吉郎兵衛が南警察署に赴いて建築許可の指令を受けた後、早速、職人の人数を増やして工事が進められた。劇場の設計は、間口十七間、奥行二十三間、総坪数三七六坪、建坪数二八五坪で、その構造は、瓦葺の御殿造りの建物であった。

建築の木材には母を用いることが考えられていた。天井については、「蠟色椽の杵を取り其の中は残らず縹珍張とし」とあることから、ふちを蠟色塗にし、その杵の中に縹珍（縹子の地に数種の色系で文様を織り出した織物）を張ることとし、和風の要素を取り入れながら、棧敷の柱には鉄材を用いるなど、堅牢な構造にする計画であったことがわかる。劇場の床下には「空気抜き」を設けて場内の換気を図るなど、衛生面にも配慮した設計にすることも考えられていたようである。また、三階からは大阪市中の景色を一望できるような構造にすることとした。さらに注目すべきことは、劇場の東西に空地をつくって火除運動場とし、高さ十八尺の防火壁を設け、楽屋の後部は土蔵造りにするなど、十分な防火対策を講じていたことである。

このように衛生や防火対策に配慮する構造になった背景には、座主の意向だけでなく、劇場取締規則なども影響していたことが考えられる。

こうして弁天座は、明治二十七年九月十九日にほぼ完成し、十月六日に落成届が南区役所に提出された。開場式は、十月十一日に行なわれ、「劇場の構造は従前のもより一層精密華麗を極め観者の目を驚かしぬ」と『大阪朝日新聞』（明治二十七年十月十三日付）の記事が報じている。

（四）浪花座の修繕・設計・建設

江戸時代、道頓堀の劇場の一つであった筑後の芝居は、明治九年（一八七六）二月に火災で焼失したため、同年九月に松島大芝居の建物を移築し

て戎座と改称して開場する。その後、明治二十年（一八八七）十月には浪花座と改称されたが、二十七年（一八九四）八月七日に劇場の破損が確認され、同月十四日に、劇場の腐朽が進んでいることを理由に、興行の差止めが警察部から命ぜられた。このときはすぐにも改築しなければならぬほど傷んでいたが、翌二十八年（一八九五）三月一日には、改築は十年間の延期が認められ、同月四日から修繕に着手することになった。

この修繕工事をてがけた儀右衛門は、履歴書②につきのように記している。

二十八年三月道頓堀浪花座主秋山儀四郎ノ囑咄ニ困リ劇場浪花座ノ大修繕三百五十坪ヲ設計及ビ工事ヲ成工ス

これによると、劇場の修繕の許可が出された同年三月に、浪花座の座主である秋山儀四郎から仕事の依頼を受けていたことがわかる。明治二十八年四月二十五日に、劇場の修繕が終わって表の板囲いを取り除いたことを『大阪朝日新聞』（四月二十七日付）が記しており、「頗る立派にて新築の如くなり」と評している。翌二十六日には修繕の検査も済ませたという。

こうして興行を再開した浪花座であったが、明治三十七年（一九〇四）四月二十九日早朝に、劇場内からの出火で焼失する。それ以降は焼け跡に、仮小屋のようなものを建てて興行を続けていたようである。

その後、劇場の再建工事が、明治四十三年（一九一〇）八月六日から始められることになり、それまで上演されていた活動写真は同月五日限りで閉場したようである。

新たな劇場の建設工事は、再び儀右衛門に依頼があった。履歴書②には、四十三年現存道頓堀大劇場浪花座新築二付座主高木徳兵衛氏ヨリ囑咄

ニ因リ設計及工事ヲ請負成工ス建坪三百五十坪
とあり、浪花座の座主である高木徳兵衛の依頼により、劇場の設計・工事

を請け負ったことが記されている。なお、履歴書③には「建坪参百六拾余坪」とある。

新築予定の劇場の構造や規模については、『大阪毎日新聞』（明治四十三年八月十日付）の記事がつぎのように報じている。

同所総坪数四百八十四坪の内劇場建坪三百八十七坪、舞台百十坪、観覧席（棧敷、出孫、新出、平場）百七十坪、俳優部屋三十六坪、表方七十一坪にして観覧席は柱無し、全部日本式ながら局部々々に新案を加へ、工費約十五万円の由

劇場は「日本式」としながらも、局部の構造には工夫が加えられる計画であったようである。その後、明治四十三年九月十八日に上棟式が行なわれることになり、十月下旬には昼夜も休まずに建設工事が続けられた。

『大阪毎日新聞』（明治四十三年十一月十六日付）によると、新しい劇場の舞台開きは、十一月十五日に行なわれた。招待客や芸妓たちなど約千五百名で客席はいっぱいになったという。また、新聞記事は、劇場の内部について「総白木造りに紅絨張りの欄を繞らせる場内の美しさと相映じ昼を欺く電燈輝く所物々皆な照り映ゆるばかりにして檜の香衣袂に浸む心地す」とも記しており、場内に多くの電燈を設置するなど、新しい工夫がみられたことがわかる。

（五）大阪歌舞伎の設計・建設

梅田停車場の南側にあった大阪歌舞伎は、大阪演劇株式会社が経営する劇場として、明治三十一年（一八九八）二月に開場した。

この会社は、福地源一郎（桜痴）（一八四一〜一九〇六）や古屋宗作（大阪府会議員）らが発起人として名を連ねていた。特に、福地は、演劇改良を進め、東京の歌舞伎座（明治二十二年開場）を創設した人物でもあった。

同会社は、大阪に新劇場の建設を計画し、『東京朝日新聞』（明治二十九

年二月七日付）の記事が、その詳細を伝えている。

昨日の新聞に記せし如く今度桜痴居士が其相談に与かる為め大阪行の必要を生じたる同地に新築の大劇場といふハ予て二三年前より其噂さありしものなるが此の劇場ハ株式組織にして社名を「大阪演劇株式会社」と号し既に此程創立認可を得たり今其の地位設計興行の目的等を聞くに敷地ハ西成郡曾根崎村二百九十三番屋敷にして梅田停車場と小桜橋との中間の大通り東側なり間口三十二間余奥行四十四間坪数一千三百三十余のうちへ四百八十七坪の劇場を建築し其の左右大道に臨みて二階若くハ三階建なる百坪内外の本家茶屋を設け此他に料理場、湯殿、土蔵、納屋、発電室を建築すれば建物総坪大凡八百四十坪となるべし剩る処の四五百坪を劇場の左右に取りて園囿となし看客運動の地となすべし、劇場の構造ハ木造西洋風の三階として前面に五層の高楼を築き地平線を抜くこと幾ど七十尺の高さに至らしめ屋上ハ石板若くハ銅板葺とし内部観■の構造ハ総て大阪府の劇場取締規則に拠るも後面の二階より五階に至る各階にハ運動場、休憩室、応接所、飲食室、遊覧場等を設置すべく劇場と茶屋との通路ハ下階と二階とに設けて在来の東京大阪の劇場の如く劇場と茶屋と懸隔して雨天の困難と退場の混雑とを避けしめ興行時間ハ場の四方を閉して全く暗黒となしこれに無数の電燈を点じて演劇する事となすべし、俳優ハ市川團十郎と特約して常に出演することなすも團十郎のみにて一年を打通す訳にハ行かざるより時に東京大阪の名優を合併せしめ興行度数ハ一箇年五回乃至七回とし特別演劇、大演劇、中演劇、小演劇の四級とす其の興行時間ハ午後一時開場遅くも十時三十分閉場として西京神戸よりの看客をして直ちに汽車に依り家に還るの便を得せしむるといふ発企人の考へにてハ工事の都合にて或ハ十一月開場に至るやも知れざれども多くハ八月中に開場式を挙げん見込のよし

これによれば、梅田停車場から小桜橋（現桜橋付近）に通じる大通りを少し南に下った東側に、劇場を建て、その左右には二階または三階建の本家茶屋を設けることになっていた。この本家茶屋は、劇場に付属し、会社が直営する茶屋のことであったと考えられる。また、劇場の外には、観客のために運動の場もつくる計画であった。

劇場は、木造西洋風の三階建とし、前面に五層の高楼を築き、屋根は石板または銅板葺にすることになっていた。内部の構造は、大阪府の劇場取締規則にしたがつてつくり、各階に運動場・休憩室・応接所・飲食室・遊覧場などを設置する予定であった。劇場内の運動場は、観客が休憩する場所のことであろう。なお、運動場はすでに東京の歌舞伎座にもみられた。さらに、劇場と茶屋との間に通路を設けて、雨天時や退場の際の混雑を避ける工夫も考えられていたようである。興行中は、四方の扉を閉ざして暗闇にし、無数の電灯を点けて上演する計画であった。

この劇場の設計・建設の仕事を請け負ったのも儀右衛門であり、履歴書①に つぎのように記されている。

廿九年十一月大阪演劇株式会社新劇場ヲ梅田停車場前ニ建設ニ付其設計ヲ柁セラレテ楽家舞台及本家店（来客食堂炊事場ヲ除ク）此坪数四百七十余坪ノ建築工事ヲ請負ヒ竣工ス福地源一郎氏ヨリ賞状ニ「繩奇墨正」ノ四字ヲ贈ラレ会社主任ヨリ賞状及金五百円ヲ贈与セラル

大阪演劇株式会社が、梅田停車場前に建設する劇場の設計を儀右衛門に依頼したのは、明治二十九年（一八九六）十一月のことであり、劇場建設の計画が新聞で報じられた九か月後に、儀右衛門が仕事を請け負っていたことがわかる。

明治二十九年十一月十五日には劇場の建設地で地鎮祭があり、三十年（一八九七）七月四日には上棟式が行なわれた。³⁶

その後、完成間近の劇場について『時事新報』（明治三十年十一月六日

付）が、つぎのように伝えている。

梅田停車場前に新築したる大劇場は本年一月中旬より起工し来月中旬には全部落成し明年一月中旬には東京の名優を招きて初開場を為す由なるが同劇場は間口十六間、奥行二十三間、建坪四百八十坪の三階建本館と間口十間、奥行十四間の楽屋及び建坪三百余坪の附属館より成り総坪数は千六百坪に及ぶを以て両側には充分の空地を控へ庭園を設くるなど用意充分なり又芝居茶屋を設けず会社附属の事務所を置き観客は望みに依り附属館に於て会社の仕出しに係る食事を為し得ること、し附属館は看客の休憩談話室に充つるなど在来の劇場とは余程趣向を異にするよし

劇場の落成時期は明治三十年十二月中旬で、完成予定の劇場は、三階建の本館（間口十六間、奥行二十三間、建坪四百八十坪）、楽屋（間口十間、奥行十四間）、附属館（建坪三百余坪）から成り、劇場の両側には庭園を設けていた。三階建の本館や周囲に空地を設置した点などは、当初の計画通りであった。

さらに注目すべきは、大阪演劇株式会社の経営方法が、従来の劇場のものとは異なっていた点である。それは、芝居茶屋を設けず、会社附属の事務所を置き、観客の希望に応じて、附属館で同社の仕出しを提供するという新しい仕組みを導入したことである。こうした方法は、これまでの大阪の劇場では、ほとんどみられないものであったのだろう。

新しい劇場の開場式は、明治三十一年（一八九八）二月十一日に行なわれた。³⁷

劇場が落成した前年十二月に、儀右衛門は賞状を贈られている。履歴書②から、その賞状の写しをつぎに紹介したい。

写

大阪歌舞伎ハ我大阪演劇株式会社カ新ニ建築スル所ヨリ我会社ハ貴下ノ熟練ト実直トヲ信シ貴下ニ任スルニ此建築ノ大匠長ヲ以テセリ貴下ハ此信任ニ体シ凡立礎ノ初ヨリ落成ノ全ニ至ル迄勉シテ工務ヲ担当シ今ヤ輪輿ノ美ヲ完備スルヲ得タリ我会社ハ貴下ノ巧勞ヲ嘉シ乃チ別紙目録ノ金円ヲ貴下ニ贈リ以テ満足ノ意ヲ表ス併テ貴下工匠ノ名譽ハ大阪歌舞伎ノ劇場ト俱ニ不朽ナルヲ望ム

大阪演劇株式会社

取締役建築主任

榎原正治 ⑧

明治三十年 十二月廿八日 印

中村儀右工門君

貴下

この賞状は、明治三十年十二月二十八日に、大阪演劇株式会社の取締役建築主任の榎原正治が儀右衛門に対し、その功勞を称えるために贈ったものである。

また、賞状の本文には、「我会社ハ貴下ノ熟練ト実直トヲ信シ貴下ニ任スルニ此建築ノ大匠長ヲ以テセリ」と書かれており、儀右衛門に新劇場の建設の依頼があった背景には、それまでに数かずの劇場建設にたずさわった技量を認められていたからではないかと推測する。

しかし、この劇場も開場後一年足らずの明治三十二年（一八九九）一月十二日に火災で焼失した。³⁸ 明治三十三年（一九〇〇）に刊行された『大阪営業案内』に、「大阪歌舞伎座劇場建築所」と記されているが、この地に再び劇場が建設されることはなかった。

（六）松島八千代座の設計・建設

明治二十二年（一八八九）十一月、大阪の西区にあった松島文楽座は、

松島八千代座と改称し、のちの三十三年（一九〇〇）十月末に改築した。³⁹しかし、その後、三十四年（一九〇一）三月二日に焼失したため、その再建を請け負ったのが、儀右衛門であった。履歴書³には、

卅四年三月現存ノ松島八千代座主吉田卯之助氏ノ囑ニ因リ八千代座新築ニ付キ其設計工事ヲ請負成工ス參百余坪吉田氏ヨリ賞状及ビ金員ヲ贈与セラル

とあり、劇場が焼失した直後に、座主の吉田卯之助から再建の依頼を受けたことがわかる。そして、同年五月一日には工事に着手することになり、柱立式の準備が進められた。⁴¹しかし、『大阪毎日新聞』（明治三十四年五月二十一日付）の記事によると、実際に再建築の許可が下ったのは五月十九日のことであり、従来の地所に加えて三十坪程度の土地を買入れ、劇場の構造についても洋風にする計画であったようである。

上棟式は八月十四日に行なわれることになり、座主および関係者一同、大工手伝いにいたるまで二百名以上が天満天神社へ参詣することや、落成の見込みが十月中旬になることを、『大阪毎日新聞』（明治三十四年八月十四日付）が報じている。

開場式は明治三十四年十一月一日に行なわれ、当日の招待客は、府高等官、各新聞記者、市参事会員、市会議員、区会議員、堂島株式役員、ざこ場連、市場連、各遊廓取締連など千五百名以上であったといふ。⁴²

工事の落成に際しては、座主の吉田卯之助から儀右衛門に対して功勞を称える賞状が贈られ、履歴書⁴にその写しが記されている。

写

当劇場建築ニ該リ君ハ工事監督ノ任務ヲ全フシ設計指揮部下精勵宜シキヲ得テ劇場模範タルノ成工ニ至リシハ君ガ巧績預テカアリ依テ其為慰勞別紙目録ノ金員ヲ贈呈シ以テ當場ト共ニ永ク君ガ巧績ヲ表章ス

明治三十四年拾一月八千代座々主

中村儀右工門君

吉田卯之助 ㊦

(七) 堀江演舞場の設計・監督

履歴書から明らかになっている仕事として、最後にあげられる劇場が堀江演舞場である。

明治末期、大阪には南地五花街、新町、北の新地、堀江などの遊廓があった。このうち、堀江遊廓では演舞場を建てる計画が起こり、その設計・監督を任されたのが、儀右衛門であった。履歴書②の欄外には、「大正三年参月ヨリ堀江遊廓演舞場新築ニ付設計及監督ス目下工事中工費九万円余」と記されており、大正二年（一九一三）三月に仕事を引き受けた。

なお、儀右衛門が大正三年（一九一四）に記した「当用日記」から、この仕事は、儀右衛門と弟の奈良市、儀右衛門の長男の宗三によって行なわれたものであったことがわかっている。⁴³

その後、落成した建物の詳細を、『大阪朝日新聞』（大正三年三月十三日付）がつぎのように記している。

昨年四月一日より工事に着手せし堀江遊廓芸練習場は十二日竣成したり、同場は総坪数四百七十坪、純日本式にて外廓の高扉は廻廊式、貴賓及び特等待合室は平安朝に室町時代を加味したる八角形の殿堂にて舞楽殿と絵馬殿とを折衷せしものにて天井及び壁画を大更、九浦、楯彦各画伯の彩筆にて飾り、尚浪華芸苑八家の額面を掲げ、楯彦、鳳山、恒富、菊所、無牛、松谿、九浦、大更の八氏丹青を凝らせりまた貴賓観覧席は正面高樓に設け、天井画は楯彦氏壁画は鳳山氏なり、観客席を雛段とし各等共其入場出場の口を区分し、下足場の如きも地下室を利用して混雑なからしめたり舞台は近代劇場建築の新傾向に準じ電燈装置、立道具、^{フットライト}脚燈等を工夫を凝らしたるものなりと

これによると、儀右衛門が仕事を引き受けた翌四月から着工され、大正三年三月十二日に工事が完成した。純日本式の建物で、貴賓および特等待合室のつくりは、「平安朝に室町時代を加味したる八角形の殿堂」であった。さらに、建物の天井や壁画、額面を、菅楯彦、上島鳳山、北野恒富、金田菊所、江中無牛、若林松谿、野田九浦、岡本大更ら、当時の大阪で活躍した画家たちが描いたという。劇場の構造は、客席の等級によって入場・出場の出入口が異なっており、下足場も地下室に設けるなど、観客の混雑を避けるようにつくられていた。また、電燈装置や脚燈など、場内には多くの工夫が凝らされていたようである。

その後、十四日に落成式が行なわれたことを、『大阪毎日新聞』（大正三年三月十五日付）が伝えており、およそ五百名の来賓客があったという。

しかし、この演舞場は二年後の大正五年（一九一六）六月に焼失した。六年五月一日には再建の工事が始まり、竣工したのは翌七年三月のことであった。同月には、「第四回木の花踊」が堀江遊廓の芸妓連によって披露され、その際に発行された冊子（堀江演舞場、大正七年三月十日発行）をみると、工事を請け負ったのが儀右衛門の弟の奈良市であり、大道具を儀右衛門と長谷川小芳が担当したことが記されている。

これらのほかにも、儀右衛門が大阪や京都の劇場建設に関わっていたことが、履歴書からわかっており、つぎにそれらの概要を記しておきたい。

大阪の天満天神社の裏門前にあった天満座は、明治二十九年（一八九六）五月に、儀右衛門がその設計・工事を請け負った。同年十二月初旬には工事が落成し、⁴⁴同月二十八日に舞台開きが行なわれた際には、千名余りの招待客で賑わったという。⁴⁵

この天満座の設計・工事を請け負っている間に、儀右衛門は、明治二十九年十一月から梅田の大阪歌舞伎の設計・建設の仕事にもたずさわった。

大阪歌舞伎が新築開場した後、明治三十一年（一八九八）五月には、道頓堀・角座の修繕の設計・工事を、座主の秋山儀四郎から依頼された。

のちの明治四十一年（一九〇八）八月、儀右衛門は、常盤座の設計・監督をてがげた。履歴書に劇場の所在地が明記されていないため、詳細は不明だが、おそらく同年十二月二十九日に落成式を挙げた千日前の常盤座であったことが考えられる。⁽⁴⁶⁾この劇場は、明治四十五年（一九一二）一月に焼失したため、儀右衛門が再建のため設計・建設の仕事を再び請け負ったことが、履歴書からわかる。なお、その落成式は、大正元年（一九一二）十月に行なわれた。

儀右衛門は、明治四十一年八月に、玉造座の設計の仕事も請け負った。玉造座は、明治四十三年（一九一〇）三月に玉造停車場前に新築開場し、劇場の建坪数は百五十坪で、千名程の見物客を収容することができたようである。⁽⁴⁷⁾三月五日から三日間行なわれた開業式には、式三番叟や歌舞伎が上演された。⁽⁴⁸⁾

大阪の老松町にあった老松座は、明治四十二年（一九〇九）七月三十一日に天満で発生した大火で焼失したが、⁽⁴⁹⁾新たに劇場を再建するために、その設計・建設にたずさわることになったのが、儀右衛門であった。劇場の上棟式は、明治四十三年七月二十八日に行なわれ、⁽⁵⁰⁾その後、同年十月二十日に開業式が催された。⁽⁵¹⁾

さらに、明治四十三年十一月には、大矢藤松の依頼により、千日前の電気館の設計・建設の仕事を引き受けた。この建物は、第一電気館と呼ばれ、翌四十四年三月十九日に新築落成の開場式が行なわれたことを、『大阪毎日新聞』（明治四十四年三月二十日付）の記事が伝えており、同劇場は和洋折衷の構造で、規模は間口十五間、奥行十一間であったという。

明治四十四年（一九一一）十一月には、高木徳兵衛から、京都・新京極の京都座の設計と監督の仕事を依頼された。ただし、『大阪朝日新聞 京都

附録』（明治四十四年四月二十五日付）の記事をみると、「純歌舞伎風の建物で赤銅張の廂など凝つたもの、いよ／＼二十九日開場式引続き初興行と決定して」と記されている。⁽⁵²⁾このことから、劇場の工事は四十四年四月末に完成しており、履歴書に記された時期と実際に劇場が開場した時期が異なっている。

儀右衛門の履歴書に記された年月と、『近代歌舞伎年表 大阪篇』や当時の新聞記事などをもとにし、各劇場の工事を請け負った時期から落成開場の時期までをまとめたものが【表3】である。

【表3】によると、明治二十六年一月から横井座新設の工事に取りかかり、その間、二十七年五月から十月までの弁天座の建設工事や、二十八年三月から四月にかけての浪花座の修繕をてがけるなど、儀右衛門がいくつもの工事を並行して行なっていたことが明らかになった。

儀右衛門がてがげた劇場は、横井座や弁天座が和風建築、大阪歌舞伎や松島八千代座が洋風建築であったことや、それぞれの劇場の構造も工夫されたものであったことがわかる。また、儀右衛門の仕事ぶりが、劇場の座主や経営者から高く評価されていたことは、履歴書に写された功績を称える賞状からも推測できる。

このように、第四期の劇場建設期は、儀右衛門の大作としての経歴のなかでも最も重要な部分を占めていることは明らかであろう。

なお、【表3】をみると、明治三十四年三月に請け負った松島八千代座の設計・建設の仕事が終わってから、明治三十年代後半は、履歴書に記された劇場建設の仕事はみられない。履歴書に記されていない空白期間を埋めるのが、儀右衛門が記した「当用日記」（明治三十七年・三十九年・四十年・四十一年・大正三年）である。今後は、日記も用いて、儀右衛門の経歴をさらに明らかにしていく必要がある。

【表3】中村儀右衛門が設計・建設・修繕に関わった主な劇場

地名・劇場名・年	明治22年 (1890)	明治24年 (1891)	明治25年 (1892)	明治26年 (1893)	明治27年 (1894)	明治28年 (1895)	明治29年 (1896)	明治30年 (1897)	明治31年 (1898)	明治32年 (1899)	明治33年 (1900)	明治34年 (1901)	明治35年 (1902)	明治36年 (1903)	明治37年 (1904)	明治38年 (1905)	明治39年 (1906)	明治40年 (1907)	明治41年 (1908)	明治42年 (1909)	明治43年 (1910)	明治44年 (大正元) (1911)	明治45年 (大正2) (1912)	大正2年 (1913)	大正3年 (1914)	
東京 向柳原																										
柳盛座																										
榎井座																										
常盤座																										
千日前																										
電気館																										
弁天座																										
浪花座																										
角座																										
大阪																										
天満																										
老松座																										
梅田																										
大阪歌舞伎																										
松島																										
松島八千代座																										
玉造																										
玉造座																										
堀江																										
堀江海舞場																										
京都 新京極																										
京都座																										
相生座																										
その他																										

※中村儀右衛門の履歴書『近代歌舞伎年表 大阪篇』当時の新聞記事などに基いて作成した。
 ※儀右衛門が仕事を請け負った年月から落成開場の時期までを示した。なお、請け負った年月が不明の場合は、着工や上棟式の時期を記した。

おわりに

以上のように、「中村儀右衛門資料」に残る履歴書五冊から、大工・中村儀右衛門の経歴をたどるとともに、そのなかでも劇場建設の仕事に注目してきた。あわせて、当時の新聞記事から、儀右衛門が関わった劇場建設の様子を明らかにしようと試みた。

その結果、儀右衛門は、和風・洋風両方の劇場の設計・建設をてがけていたことがわかった。

儀右衛門は、嘉永五年（一八五二）に大坂に生まれ、父のもとで大工修業をした後、各地で小学校や病院などの公共の建物や個人の邸宅を建てるようになっていった。特に、明治十八年（一八八五）から二十四年（一八九一）までは東京を中心に活動し、この間、皇居造営の工事をはじめ、西洋建築を学んだ建築家の松ヶ崎萬長や瀧大吉の監督のもとで、建築の仕事にたずさわっている。こうした経験が、のちに和風だけでなく洋風の劇場を設計・建設する上で役立った可能性が高い。

明治二十五年以降、儀右衛門は大坂に戻って、千日前、道頓堀、天満、梅田、松島、玉造、堀江など、各地の劇場の設計・建設をてがけるようになった。こうした劇場のなかには、和風はもちろん洋風建築の劇場も含まれている。

明治二十七年（一八九四）十月に再建された道頓堀の弁天座は、御殿造りの和風の劇場でありながら、木材だけでなく、鉄材も用いた堅牢な構造とし、換気などの衛生面に配慮するだけでなく、十分な防火対策も講じられていた。こうした構造になった背景には、座主の意向に加え、当時の劇場に関する法令「劇場取締規則」なども影響していたことが考えられる。さらに、明治四十三年（一九一〇）十一月に開場した浪花座も和風建築であったが、内部には多くの電燈を設置するなど、西洋の設備を用いた構造

であった。

一方、大阪歌舞伎（明治三十一年開場）や松島八千代座（明治三十四年開場）は、当初から洋風建築の劇場を建てることを意図して設計された。

特に、梅田の大阪歌舞伎は、大阪演劇株式会社が経営する三階建の劇場で、この劇場の敷地には、観客が食事や休憩をするための附属館を設けるなど、これまでの大阪の劇場ではみられない新しい仕組みが導入されていた。従来の観劇のあり方は、観客の食事の手配や幕間の休憩場を、芝居茶屋が提供していたが、それに代わり、附属館を設置することで、これまでの観劇方法を変えようとするものであった。

ほかにも、明治四十四年（一九一〇）三月に開場した千日前の電気館は、和洋折衷の建物であったとされるなど、儀右衛門は、和風・洋風両方の劇場の設計・建設仕事をこなしていたのである。

なお、「中村儀右衛門資料」のなかには、劇場の建築図面や建築仕様書・明細書、儀右衛門の日記などが残っている。今後、これらの資料も検討することで、履歴書以外からも、劇場建設の具体的な様子が明らかになると考える。

註

(1) 国立劇場近代歌舞伎年表編纂室編『近代歌舞伎年表 大阪篇』（全九巻十冊、八木書店、一九八六年～一九九五年）。

(2) 「大阪の劇場大工 中村儀右衛門資料」の概要および資料目録、中村儀右衛門の主な経歴などについては、藪田貫・藤岡真衣「大阪都市遺産と道頓堀——大阪の劇場大工 中村儀右衛門資料の紹介をかねて——」（『大阪都市遺産研究』第三号、関西大学大阪都市遺産研究センター、二〇一三年三月）がある。

- (3) 建築史の立場から劇場を分析したものに、後藤慶二氏の『日本劇場史』(岩波書店、一九二五年)、竹内芳太郎氏の『日本劇場図史』(壬生書院、一九三五年)、凶師嘉彦氏の『日本の劇場回顧』(相模書房、一九四七年)、須田敦夫氏の『日本劇場史の研究』(相模書房、一九五七年)などがある。その後、演劇研究、芸能史研究、文化史研究の視点から、江戸時代以降の歌舞伎の劇場空間や内部構造などを考証したものが、服部幸雄氏の『大いなる小屋 江戸歌舞伎の祝祭空間』(一九八六年初出、講談社、二〇一二年)である。近代の劇場については、徳永高志氏の『芝居小屋の二十世紀』(雄山閣出版、一九九九年)があり、劇場を取り巻く社会に注目し、東京をはじめ、大阪や地方の劇場を分析したものがあつた。また、主に東京の劇場の観劇空間について論じたものに、神山彰氏の『近代演劇の水脈―歌舞伎と新劇の間』(森話社、二〇〇九年)がある。さらに、東京を対象とし、日本の劇場空間の近代化について分析した永井聡子氏の『劇場の近代化―帝国劇場・築地小劇場・東京宝塚劇場』(思文閣出版、二〇一四年)が刊行されるなど、近代以降の日本の劇場の研究が近年急速に進んでいる。
- (4) 新富座は、明治五年(一八七二)に、浅草猿若町にあつた守田座が、新富町に移転し、八年に改称した劇場である。この新富座が、江戸時代以来の劇場と大きく異なる点は、江戸幕府から興行の許可を得た印であつた樽を取り外すなど、従来の様式を変更しただけでなく、場内でのガス燈の導入や椅子席の一部採用など、西洋の設備を取り入れたことである。また、海外からの来賓を招くなど、社交の場としても活用された。そのため、同座は以後の劇場建設に大きな影響を与えた存在として位置づけられている。
- (5) 木村錦花『守田勘彌』(新大衆社、一九四三年)参照。同書によると、新富座の構造は、屋根は総瓦、外部は塗屋造り、腰は海鼠壁、建物の東西には運動場が設けられた。舞台と観客席は、長谷川勘兵衛が考案した「阿弥陀」と呼ぶ方法でつくられ、観客がどこにいても舞台が見やすいようになっていたという。
- (6) 前掲稿註(2)参照。
- (7) 角座に関する図面や仕様書については、橋寺知子「関西大学大阪都市遺産研究センター所蔵中村儀右衛門資料における道頓堀角座関連資料の概要」(『平成二十五年年度日本建築学会近畿支部研究報告集』第五十三号計画系、二〇一三年五月)、同「大正期の「角座」改修図面」(大谷渡編『大阪の近代―大都市の息づかい』東方出版、二〇一三年)がある。
- (8) 拙稿「梅田の「大阪歌舞伎」―明治三十一年に開場した新築劇場―」(『大阪都市遺産研究』第三号、関西大学大阪都市遺産研究センター、二〇一三年三月)。
- (9) 「中村儀右衛門資料」のなかには、明治三十七年・三十九年・四十年・四十一年・大正三年の「当用日記」五冊が残っている。これらについては「中村儀右衛門『当用日記』について」(研究代表者 藪田貫『第四十三回(平成二十六年度)三菱財団法人文学科学研究助成報告書 芝居町道頓堀の復元的研究―芝居小屋と芝居茶屋を中心に―」(関西大学なにわ大阪研究センター、二〇一六年)に詳しく記されており、「中村儀右衛門『当用日記』(明治三十七年) 翻刻」も同書に所収されている。
- (10) 「中村儀右衛門資料」については、大阪くらしの今昔館(大阪市立住まいのミュージアム)の平成二十六年(二〇一四)度企画展「再現!道頓堀の芝居小屋―道頓堀開削三十九年―」で展示された。
- (11) 前掲稿註(8)で、中村儀右衛門の履歴書五冊の概要を紹介しており、それに基づいて記した。
- (12) 国立劇場近代歌舞伎年表編纂室編『近代歌舞伎年表 大阪篇 第三巻』(八木書店、一九八八年)参照。
- (13) 東京の皇居造営の仕事にたずさわつた大工棟梁として、明治期から大正期にかけて関西を中心に活動した今井平七の事例がある(大川三雄「藤田綱島邸の概要と大工棟梁・今井平七について」(『日本建築学会計画系論文集』第五二六号、一九九九年十二月)。
- (14) 松ヶ崎萬長の経歴については、岡田義治・初田亨「建築家 松ヶ崎萬長の初期の経歴と青木周蔵那須別邸―松ヶ崎萬長の経歴と作品(そのI)―」

〔日本建築学会計画系論文集〕第五一四号、一九九八年十二月）、同「建築家 松ヶ崎萬長の後期の経歴と作品―松ヶ崎萬長の経歴と作品（そのⅡ）―」（『日本建築学会計画系論文集』第五一九号、一九九九年五月）に詳しい。萬長は、岩倉使節団に留学生として同航し、そのままドイツに留まっ
て軍事と建築を学んだ。帰国後、皇居御造営事務局の出仕を経て、臨時建
築局に勤務した。その一方で、造家学会の創立委員の一人として同会の発
展に尽力した。萬長は、日本と台湾で、ドイツの建築技術を導入した建築
物の設計をてがけた。

- (15) 瀧大吉については、堀口甚吉「瀧大吉氏の建築家としての業績」（『日本建築学会論文報告集』号外、一九六五年九月）、平山育男「瀧大吉の肖像写真と関西行について」（『日本建築学会計画系論文集』第七三七号、二〇一七年七月）、杉山英男「近代建築史の陰に 第八回・第九回・第十回 第六章 瀧大吉」（その一、その二、その三）（『建築技術』No.六〇六、六〇七、六〇八、二〇〇〇年）などに詳しい。大吉は、明治十六年（一八八三）に工部大学校を卒業後、コンドルの下で建物の設計と工事監督に関わり、造家学会の創立にも尽力した。明治工業会社は、大吉が明治二十一年に神戸に創立したが、翌二十二年に退職した。その後、大阪に建築事務所や工業夜学校を開設し、明治二十四年には陸軍省につとめ、軍に関連する建築物をてがけた。

- (16) 昭和十一年（一九三六）に刊行された『近代建築画譜』（近代建築画譜刊行会）によると、儀右衛門は、岡部建築事務所が設計した道頓堀・角座の施工を担当した。劇場は大正八年六月に起工し、翌九年十月に竣工した。ただし、『近代歌舞伎年表 大阪篇 第六卷』には、大正十年十月に改築落成式を行なったことが記されている。

- (17) 東京の柳盛座については、阿部優蔵『東京の小芝居』（演劇出版社、一九七〇年）、佐藤かつら『歌舞伎の幕末・明治 小芝居の時代』（ぺりかん社、二〇一〇年）参照。

- (18) 『東京朝日新聞』（明治二十四年六月二十七日付）。

- (19) 佐藤前掲書註（17）参照。東京府で、明治二十三年に改定された劇場取締規則では、それまでの官許の劇場が「大劇場」、小芝居（道化踊）が「小劇場」となった。小芝居は、道化踊など見世物の名目で興行許可を受けていたが、実際は歌舞伎などを上演した。柳盛座は小芝居の座であったが、規則の改定後は小劇場となった。

- (20) 『大阪朝日新聞』（明治二十九年三月十日付）、『大阪毎日新聞』（明治二十九年三月九日付）。
- (21) 『大阪朝日新聞』（明治二十九年三月十一日付）。
- (22) 『大阪朝日新聞』（明治二十九年三月二十二日付）。
- (23) 『大阪毎日新聞』（明治二十七年五月七日付）。
- (24) 『大阪朝日新聞』（明治二十七年九月十九日付）。
- (25) 『大阪毎日新聞』（明治二十七年十月七日付）。
- (26) 『大阪朝日新聞』（明治二十七年八月九日付）。
- (27) 『大阪毎日新聞』（明治二十七年八月十六日付）。
- (28) 『大阪毎日新聞』（明治二十八年三月三日付）。
- (29) 『大阪毎日新聞』（明治二十八年四月二十八日付）。
- (30) 『大阪朝日新聞』（明治三十七年四月二十九日号外）。
- (31) 『大阪朝日新聞』（明治四十三年八月四日付）。
- (32) 『大阪朝日新聞』（明治四十三年九月十八日付）。
- (33) 『大阪朝日新聞』（明治四十三年十月二十二日付）。
- (34) 梅田の劇場「大阪歌舞伎」の建設過程については、前掲稿註（8）参照。
- (35) 『大阪朝日新聞』（明治二十九年十一月十三日付）、同（明治二十九年十一月十七日付）。
- (36) 『大阪朝日新聞』（明治三十年七月六日付）。
- (37) 『大阪朝日新聞』（明治三十一年二月十三日付）。
- (38) 『大阪毎日新聞』（明治三十二年一月十四日付）。
- (39) 『大阪毎日新聞』（明治三十三年十一月一日付）。
- (40) 『大阪毎日新聞』（明治三十四年三月三日付）。

- (41) 『大阪朝日新聞』(明治三十四年四月二十五日付)。
- (42) 『大阪毎日新聞』(明治三十四年十一月三日付)。
- (43) 前掲書註(9)参照。
- (44) 『大阪朝日新聞』(明治二十九年十二月九日付)。
- (45) 『大阪朝日新聞』(明治三十年一月一日付)。
- (46) 『大阪朝日新聞』(明治四十一年十二月三十一日付)。
- (47) 『大阪毎日新聞』(明治四十三年二月二十七日付)。
- (48) 『大阪朝日新聞』(明治四十三年三月八日付)。
- (49) 『東京朝日新聞』(明治四十二年八月一日付)、『大阪朝日新聞』(明治四十二年八月一日付)。
- (50) 『大阪朝日新聞』(明治四十三年七月二十二日付)。
- (51) 『大阪朝日新聞』(明治四十三年十月二十一日付)。
- (52) 明治四十四年四月に開場した京都座については、国立劇場調査養成部芸能調査室・近代歌舞伎年表編纂室編『近代歌舞伎年表 京都篇 第五卷』(八木書店、一九九九年)、「京都市劇場史略図―近代歌舞伎年表 京都篇 別巻付録―」(国立劇場調査養成部調査資料課・近代歌舞伎年表編纂室編『近代歌舞伎年表 京都篇 別巻』八木書店、二〇〇五年)参照。

主な参考文献

- ・伊原敏郎『明治演劇史』(早稲田大学出版部、一九三三年)
- ・岡本綺堂『明治劇談 ランプの下にて』(岡倉書房、一九三五年。岩波書店、一九九三年復刊)
- ・高谷伸『明治演劇史伝(上方篇)』(建設社、一九四四年)
- ・堂本寒星『増補改訂 上方演劇史』(春陽堂、一九四四年)
- ・今和次郎監修・大泉博一郎編集『建築百年史』(建築百年史刊行会、一九五七年)
- ・村松貞次郎『大工道具の歴史』(岩波書店、一九七三年)

- ・岸本一郎編『明治時代上方芸界資料(歌舞伎資料選書・二)』(国立劇場調査養成部・芸能調査室、一九七七年)
- ・国立劇場近代歌舞伎年表編纂室編『近代歌舞伎年表 大阪篇 第一巻(第六巻)』(八木書店、一九八六年(一九九一年))
- ・新修大阪市史編纂委員会編『新修 大阪市史 第五巻』(大阪市、一九九一年)
- ・新修大阪市史編纂委員会編『新修 大阪市史 第六巻』(大阪市、一九九四年)
- ・徳永高志『芝居小屋の二十世紀』(雄山閣出版、一九九九年)
- ・小沢朝江『明治の皇室建築 国家が求めた(和風)像』(吉川弘文館、二〇〇八年)
- ・神山彰『近代演劇の水脈―歌舞伎と新劇の間』(森話社、二〇〇九年)
- ・笹川慶子『大阪都市遺産研究叢書 別集一 明治・大正 大阪映画文化の誕生「ローカル」な映画史の地平にむけて』(関西大学大阪都市遺産研究センター、二〇一二年)
- ・永井聡子『劇場の近代化―帝国劇場・築地小劇場・東京宝塚劇場―』(思文閣出版、二〇一四年)

〔付記〕二〇一六年四月の関西大学なにわ大阪研究センターの設置後、二〇一七年四月から二〇一八年三月まで同センターの非常勤研究員として在籍した。その間、「大阪の劇場大工 中村儀右衛門資料」の調査研究に従事し、その成果として本稿を執筆した。調査研究の便宜をはかっていた関西大学なにわ大阪研究センターのスタッフならびにセンター長杉本貴志教授に心より御礼を申し上げます。

(ふじおか まい 関西大学非常勤講師)